

ほつ ぽう せ かい 北方世界の中の青森県

1 青森県のアイヌ民族

◆江戸時代の青森県は、北海道を除いて唯一、アイヌ民族が居住した地です。弘前藩領を見ると、津軽半島の津軽海峡に面した地域と陸奥湾に面した夏泊半島の先端に、盛岡藩領では同じく津軽海峡に面した下北半島に、それぞれアイヌ人の集落がありました。

◆当館所蔵の正保2年（1645）「陸奥国津軽郡之絵図」（貞享2/1685年の写し）には、アイヌ人の居住地は「狄村」と書かれており、江戸時代初頭からアイヌ人が住んでいたことが分かります。ただ、狄村には村の石高や村名がありませんので、集落の詳細いようすは分かりません。

◆江戸時代中期に編集された「津軽一統志」という弘前藩の歴史書には、アイヌの居住地と家数が次のようにあります。

・宇田村	1軒	・ほこ崎村	1軒
・五生塚村	2軒	・砂ヶ森村	6軒
・袈月村	1軒	・小泊村	4軒
・山派村	1軒	・松ヶ崎村	9軒
・六条間村	2軒	・藤嶋村	1軒
・釜野沢村	3軒	・宇鉄村	4軒
・龍飛村	1軒		計42軒

◆下北半島の場合は、国絵図などに「狄村」と書かれていないため、アイヌの人々が具体的にどこに住んでいたかは、よく分かりません。しかし、盛岡藩の家老席日誌「雑書」には、「田名部」の夷が藩主に拝謁するため盛岡にやって来て、熊皮などを献上したという記事があります。ここでいう「田名部」は現在のむつ市田名部という限られた地域ではなく、田名部通（下北半島全体の呼び名）のことと思われます。

◆ほかにも、元禄3年（1690）に風間浦村

異国間のアイヌの父子が盛岡藩主に謁見したことや、同村の下風呂に残された村絵図に「蝦夷屋敷」という記載があることから、アイヌの人々が下北半島の風間浦村やその周辺の沿岸部に居住していたことは、間違いありません。

2 アイヌ語地名と青森県

◆寛文期（1661～73）に入ると、北奥の諸藩では、アイヌの人たちに藩主へのお目見え（拝謁）を強制するようになりました。「ウイマム」と呼ばれる拝謁式を行って熊皮・真珠・オットセイなど珍しい産物を献上させ、代わりに米・酒・銭を与えました。アイヌを支配していると見せることで、幕府やほかの大名に対し、自分の権威の大きさを示す意味があったのです。

◆18世紀中期に入ると、弘前藩・盛岡藩ではこうした考え方が薄れていきました。しかし、本州よりもはるかに多くのアイヌを領内に抱える松前藩はそうは行きません。アイヌの人々の服装・生活習慣・名前などを日本人同様にする政策がとられ、アイヌ人たちはしだいに、民族としての痕跡を留めないようにさせられていきました。

◆このような歴史を持つ青森県には、アイヌ語に由来すると思われる地名が、数多く残っています。代表的なアイヌ語地名を紹介しましょう。

・尻労（東通村）

「シリ」（山）＋「ツカリ」（～の手前）
＝「山の手前」。シリに当たるのが尻労（東通村）の桑畑山で、北海道の静狩（長万部町）も同じような地形です。

・奥戸（大間町）

「オ」（川尻）＋「ウコッ」（くつつく）

+「ペ」(場所) = 「川尻で二つの川が合流している所」。奥戸(大間町)では大川目と小川目という二つの川が、海岸付近で合流しています。北海道には紋別郡(網走支庁管内)に興部町があります。

・釜谷(風間浦村蛇浦)

「カマ」(平たい岩) + 「ヤ」(海岸) = 「平たい岩のある海岸」。北海道には津軽海峡に面して三か所に、釜谷という所があります。

・目名(東通村)

「メナ」は「細い川」とか「枝川」の意味です。小さい目名川が大きな田名部川に合流しているのので、この名が付きました。むつ市大畑にも「小目名」の地名があり、北海道には道南を中心に同じ地名があります。

・シレットコ(むつ市脇野沢)

「シル」(地・山) + 「エトコ」(先・先端) = 「山の先端」。現在の脇野沢にこの地名はありませんが、昔は九艘泊の北の岬を「シレットコ」と呼んだようです。北海道の知床が特に有名です。

3 アイヌ民族と蝦夷錦

◆アイヌの人たちは舟で海に出かけ、漁や交易をしていました。時には樺太や沿海州まで出かけ、そこに住む少数民族と接触して、さまざまな交易品をもたらしました。これを山丹交易といい、北海道アイヌがその一端をになっていました。

◆彼らもたらした物として、蝦夷錦があります。蝦夷錦は中国清朝の皇帝や役人たちが着た絹服のお古で、清朝に帰順した少数民族に下げ与えられたものです。日本では文化人や大名らが珍重し、中国渡りの豪華な布地として、多くの需要がありました。

◆北海道には、堂々とした官服仕立てのものや、切地に直したものがあります。しかし青森県では、そのほとんどが仏壇などを飾る打敷や、物を包む袱紗に加工されています。おそらくはアイヌから蝦夷錦を手に入れた日本人が、航海安全・商売繁盛・子孫繁栄などを願ってお寺に納めたものと思われます。このように、江戸時代の北の海は閉ざされていたのではなく、そればかりか「北のシルクロード」ともいべき豊かな交流を持っていたのです。



津軽海峡南北岸の同地名
(山田秀三『アイヌ語地名の研究』より一部改)



蝦夷錦・龍文打敷(当館蔵) 19世紀中期のもの